

フットボールのアメリカニゼーション (2)
19世紀における大学スポーツの環大西洋史をめざして

Americanization of Football (2) Toward a Trans-Atlantic
History of the 19th Century College Sports

小塩 和人
Kazuto OSHIO

The purpose of this research note is to locate a trans-Atlantic movement of sports in proper perspective by analyzing the early transformation of football, with particular focus on the higher educational institutions. It will first describe the historiographical necessity of “post-national/ist” American Studies. Then, it will illustrate how British football, namely soccer and rugby, came across the Atlantic to American colleges in the 19th century. And it will depict how these two types of European footballs transformed themselves into American style football especially in the 1870s. As Walter Camp, the “father of American football,” among others depicted, in the evolution of American football from English rugby, the initial years during the Gilded Age was extremely critical. When American football gained popularity in the late 19th century, it was significantly rougher than the game into which it eventually evolved. Finally this note will end with an observation that various factors including “muscular Christianity” contributed to the evolution of American football into a form that one could recognize as “American” game.

I

アメリカ合衆国（以下アメリカと略す）の歴史は、一国史的視点に立った研究が続いてきた。つまり、エイミー・カプランの指摘を待つまでもな

く、アメリカ像は歴史学一般によくあることだが、伝統的に国境にしばられ国家中心主義的あるいは微視的研究を脱していない、と批判されてきた。確かに、「アメリカ研究」は、20世紀半ば、第二次世界大戦後の冷戦という文脈の中で、アメリカが覇権国家としての自己像を模索する中で、いわば国家プロジェクトとして始まったことは疑いの余地がない。その中心にいたのが、ピューリタニズムの研究者ペリー・ミラーであった。彼は、聖書共同体を新大陸の「荒野」に創生したピューリタンたちにアメリカの国家的原点を求めた。その後、この考え方を継承したアメリカ研究者たちは、アメリカを無垢な処女地と考え、新しいエデンの園としてアメリカを礼賛する神話的アメリカ観を共有していたのである。これら「神話象徴学派」が活躍した東西冷戦という歴史的枠組みが解体した今日ですら、いまだに外交、軍事、経済などの分野における世界覇権をめざし続けているアメリカの姿勢は、引き続き問題を抱えている。こうした傾向を打破するために、アメリカをより広い地域との交流の中で、相対的かつ超域的にとらえる研究が必要だとされている。¹

そこで、本稿は、文化現象のなかでもスポーツを取り上げ、その歴史的変容について、環大西洋的視点から多角的にアプローチすることで、新たなアメリカ像の模索を目的とする。すなわち、人、もの、思想の環大西洋交流によって、越境的に海を渡ったスポーツが、「アメリカ」という場を経ることによって、どのように変容し、受容あるいは拒絶されてきたのかを検証する。たとえば、フットボールというスポーツは、野球と同様に大西洋の彼方、イギリスから渡ってきたものである。しかし、野球は、ニューヨーク州北部に位置するクーパーズタウンの殿堂で謳われているように、1839年にアブナー・ダブルデイが発明したアメリカ産のスポーツである、と広く考えられている。この「神話」は、1908年にアルバート・スポルディングが生み出したものだが、いまだに野球はイギリス生まれのスポーツであることを認めようとしない傾向がアメリカでは非常に強い。実際には、1834年に出版された『スポーツの本』にイギリスの「ラウンダー (rounder)」を起源とする旨、明記されていた。さらに遡るならば、1748年にイギリ

1 Amy Kaplan, “Left Alone with America”: The Absence of Empire in the Study of American Culture” in Amy Kaplan and Donald E. Pease, eds. *Cultures of United States Imperialism*. Durham: Duke University Press, 1993, 3-21.

ス文学において、1762年にはアメリカ文学において、「ベース・ボール (baseball)」という言葉が使われていたにもかかわらず、である。²

一般にアメリカの大学スポーツは、はっきりとイギリスからの直接的影響を受けて発展してきた。ロナルド・スミスの指摘にもあるとおり、アメリカの大学スポーツのモデルとなったのは、「約四分の一世紀先を走っていた」イギリスである。³ 1167年に設立されたオックスフォード大学は、その約40年後にできたケンブリッジ大学とともに、学生の出自である紳士の上流階級を反映したスポーツを発展させた。たとえば、ボート、クリケット、乗馬、狩り、テニスをはじめ、ボクシング、フィッシング、ハンドボール、水泳、そしてフットボールが盛んであった。こうしてオックスフォードとケンブリッジ両大学でそれぞれ展開したスポーツが、大学間対抗競技となった19世紀前半には、大西洋のこちら側、アメリカの東海岸でも同様の動きとなって現れた。たとえば、1840年代にテムズ川でのケンブリッジとオックスフォード大学によるボートレースが行われるようになった頃、イギリスの影響を受けたハーバードとイエール大学にもボート部ができたのである。⁴

このように伝統的な大学スポーツの歴史に関していえば、環太平洋圏において、オックスフォードとケンブリッジ両大学の影響を受けたハーバードとイエール両大学が、アメリカ国内で他の大学に対して影響力をもつ、という歴史的構図が認められよう。たとえば、イギリスからアメリカへは、文字で書かれた規則や（プロフェッショナルリズムの対極にある）アマチュアリズムが、時間と空間を越えて移動した。しかし、スミスが指摘しているように、「階級の存在や機会の自由といった両国の間に存在する文化的違いが原因で、アメリカの大学スポーツは、オックスフォードやケンブリッジのものとは違うもの」へと変容していく。事実、アメリカにおける大学スポーツは、東海岸の少数の大学に限られることなく全米に拡大し、またアマチュア主義も名ばかりで、商業主義に基づくプロフェッショナル主義

2 Allison Danzig, *Football: Teams, Players, and Coaches*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1956, 3-4.

3 Ronald A. Smith, *Sports and Freedom: The Rise of Big-Time College Athletics*. New York: Oxford University Press, 1988, 4.

4 Ibid.

が台頭していくのである。⁵

もちろん、アメリカの大学でスポーツが行われた歴史は、19世紀より遙か以前の植民地時代にまでさかのぼることができる。たとえば1734年、アメリカに大学がまだ二つしか存在しなかった時代に、ハーバードの学生たちは、フットボールとベースボールに興じていた記録が残されている。また、18世紀半ばには、南部バージニア州のウィリアム・アンド・メアリー大学の学生が、乗馬や狩りにいそしんでいた。それは、同大で教鞭を執る牧師たちが、イギリスのオックスフォード大学で教育を受けた影響が大きかった。事実、アメリカ革命前に存在していた9大学のほとんどは、改革派のプロテスタントあるいは第一次大覚醒による福音主義者たちが創設したものであったから、イギリスのオックスフォードならびにケンブリッジ大学と比較すると、スポーツに対する姿勢に厳しさがあった。つまり、身体運動を奨励しつつもスポーツとなると、アメリカの大学関係者は、より慎重な姿勢をとったのである。したがって、スポーツを大学の宣伝材料として使ったり、大学間のライバル意識などによってスポーツが盛んになるのは、後述のように南北戦争後ポストベラムの時代を待たねばならなかったのである。⁶

さて、アメリカの大学がイギリスの大学をモデルとしたとき、移植されたのはカリキュラムばかりでなく、いわゆる生活様式にも影響が及んだ。たとえば、中世ヨーロッパ大陸の大学がパリ、ウィーン、ケルン、パドヴァといった大都市の中央に建設されたのと対照的に、イギリスそしてアメリカの大学は都市の外にキャンパスが設けられたのである。これは、ニューヨーク市内に創られたキングス・カレッジ（後のコロンビア大学）を除き、都市の誘惑から学生を遠ざけようとする考えがあったとされる。いわゆる「人格形成」を目的として田舎につくられたイギリスの大学では、学生は教授と生活を共にし、後者が前者を管理監督する形をとった。もちろん、この温情主義的な構造は、独立革命を経て、アメリカでは自由を追求するものへと移行していく過程でゆっくりと変化していくのである。たとえば、大学当局が提供する宗教教育を含むカリキュラムに対して反旗を翻して、

5 Smith, *Sports and Freedom*, xi.

6 Courtland Canby, "A Note on the Influence of Oxford University upon William and Mary College in the Eighteenth Century" *William and Mary Quarterly* 21 (July 1941): 243-7.

学生が課外活動を始めるといった現象が散見された。ハーバード、イエール、プリンストン大学では、革命期にディベートを行う論争部ができたのを始め、革命後はフラタニティーが創設され、さらにクラス対抗の行事が盛んになっていく。

こうしてアメリカの大学において対抗競技が盛んになるのは、19世紀半ばである。たとえば、大学対抗競技会の起源は、1852年のハーバード対イエールのレガッタにさかのぼることができよう。その後、1905年に全米大学体育協会（National Collegiate Athletic Association: NCAA）が組織されるまでの約半世紀、アメリカの大学スポーツは、大西洋をはさんだイギリスからの文化移植のプロセスを経ながら、徐々に拡大していくのである。その中で、先述のコマーシャルリズムとプロフェッショナルリズムの例は枚挙に暇がないが、たとえば、大人数の観客を収容できる巨大なスタジアムが大学構内に建設され、経済的支援を受ける優秀な学生をリクルートするために多額の給料で専門職のコーチが雇われ、そしてあらゆるメディアが大学スポーツについて大いに書きたてた。もちろん、そこにはスポーツが学術面での大学の機能をないがしろにしている、あるいは過度の暴力と化すという批判もあった。

II

事実、1850年代にはほとんどの大学キャンパスで、上級生による新入生へのしごきと通過儀礼の儀式として、フットボールが定着していた。ユニタリアン派の牧師で著述家でもあったトマス・ヒギンソンは、大学対抗戦が行われる以前の1840年代、ハーバード大学におけるフットボールを、つぎのように回想している。「私は今でも思い出す。あの『デルタ』〔ハーバード大学のスポーツ競技場〕に集まったときのわくわくした気分を。秋の夕暮れ、試合が行われている最中の喜びに満ちた叫び声、ボールの発する重く鈍い響き、踏みしだかれた草の素帽らしい匂い・・・そしてあの見事な『突進』を。私にとってそれは大いなる男たちのゲームであった」と。しかし、このサッカー型ゲームはかなりの「暴力と野蛮さ」をともなった形で行われていた。⁷

また、1850年代に行われていた学年対抗フットボールについて、イエー

ル大学のある1年生と2年生の二人の学生は「大声で怒鳴り、叫び、鼻血を拭う、すべての色が、純白の色から深紅のバラ色 [つまり血の色] へと変わるなか、シャツは裂かれ、縫目は引きちぎられ、平和が侵され、残されるのはズボンの切れ端だけ」と記述している。さらに、当時のハーバード大学では、秋学期の初日は「血の月曜日」とも呼ばれていた。なぜなら、毎年この日、新入生と上級生との間で学年対抗乱闘戦が行われるのが常だったからである。しかしこの乱闘戦のあまりの残忍さゆえに、1860年に大学教員たちはその催しに禁止を言い渡した。彼らはとくに2年生に対し、フットボールやその他の形態のしごきに関する大学教員の命令に違反した場合、即刻退学となる由、強く警告したのである。⁸

1860年代後半のアメリカ社会は、大学スポーツの花形として、フットボールがキャンパスの壁を越えて、対抗戦種目となるのだが、これまでにないほどの物質的豊かさを謳歌しようとしていた。たとえば、南北戦争が終わって新興国家が一つの大陸市場を形成する中で、大西洋から太平洋に至る大陸横断鉄道が金の釘で結ばれ、ロッキー山脈では次々と金鉱が発見され、グレートプレーンズではキャトル・キングダムが一世を風靡し、西部フロンティアは開拓者たちの西漸運動でごったがえしていた。一方、東部ではペンシルベニア州ピッツバーグの製鉄工場が、ニューイングランド地方の紡績工場がフル稼働していた。戦争で負けた南部ですら、かのグラント将軍を合衆国大統領に就任させたのである。さらに、1870年からの20年間に、アメリカの人口は4000万から6300万に膨れ上がり、世紀末の7600万人に向かって急上昇する過程にあった。また、技術革新も文字通り日進月歩で、1873年にはファイロ・レミントンがタイプライターの

7 Thomas W. Higginson, "The Gymnasium, and Gymnastics in Harvard College" in F. O. Vaile and H. A. Clark, *The Harvard Book*. Cambridge: Welch, Bigelow, 1875, 187, qtd. in Smith, *Sports and Freedom*, 67. アメリカにおける初期のフットボールは植民時代にさかのぼる。最初は多忙な生活を強いられたが、植民者たちはようやくそうしたことにも馴れて、多少の閑暇を見つけるようになると、全く自然と、気晴らしのために母国でやっていた簡単なボールゲームを始めた。このゲームはボールさえあれば、用具が不要で、人数の制限もなかった。アメリカにおける一番古い記録としては、1609年に植民者たちがふくらませた円い空気袋を蹴っていたという。17から18世紀にかけてさまざまな社会機構の発達にとまない、フットボールも次第にグループの競技種目となったのである。

8 Walter Camp and Lorin F. Deland, *Football*. Boston: Houghton Mifflin, 1896, reprint, 2010, 163.

特許を申請し、翌1874年にはニューヨークで電気路面電車が走り、コネチカット州ニューヘブーンで電話による通信が初めて行われた1878年にトマス・エディソンが電話、その翌年に電球の特許を獲得したのであった。この「金びか時代」に、ジョンズ・ホプキンス大学が1876年に門戸を開き、1885年には鉄道王リーランド・スタンフォードが自らの名を冠した大学を開き、1892年にはシカゴ大学が開学するのである。19世紀後半のアメリカは、長く暗い戦争終結後の明るい未来を予見していたのである。⁹

一方、長く「血みどろの」戦争が終わった後のアメリカ社会では、男らしさを経験する機会がなくなった、と嘆く声があがった。ジェラルド・ジェムズが指摘しているとおり、彼らは、大学フットボールの野蛮性・危険性・商業性・非知性に疑問を呈する反対派をよそに、人格形成に不可欠だ、としてフットボールを大いに奨励した。彼ら賛成派は、勇気、自己犠牲、チームワーク、積極性といった男らしさの証明をフットボールに求めたのである。まさに、アメリカ国内を二分した戦争が終わった後、ようやく国内市場が統一されて国際的規準で見ても世界第一の農業国にのし上がり、さらに上を目指すアメリカにとって、ヨーロッパと伍して競争で勝ち抜くためには、フットボールで培われる人材が必要だと考えられたのである。すでに、イギリスとの国際経済競争を強く意識していたアメリカでは、世界に民主主義と資本主義とキリスト教を広げる使命を感じる人が増えていた。他方、心理学者や社会評論家が、アメリカ国内に蔓延する女性化を嘆いていた。つまり、家庭では母親に、小学校では女性教師によって教育されるアメリカの子どもたちが、女性化していくと考えられた。そして、女性自身が、参政権や高等教育を受ける権利を激しく主張することで、社会全体の男性性が衰退していく危惧がもたれていた。さらには、伝統的に男性の領域だったスポーツにも女性の進出が目覚しかったのである。¹⁰

9 Thomas G. Bergin, *The Game: The Harvard-Yale Football Rivalry, 1875-1983*. New Haven: Yale University Press, 1984, 2-3.

10 Gerald R. Gems, "American Sports, 1861-1889" in Murray R. Nelson, ed. *Encyclopedia of Sports in America: A History from Foot Races to Extreme Sports*. Westport, CT: Greenwood Press, 2009, 58.

III

さて、大西洋の彼方イギリスにおいて、フットボールが大学スポーツとして成立する過程で、様々な競技規則が成文化されていった。そもそもフットボールは、伝統的に足で蹴るスポーツであったが、19世紀半ばに手で持って走るものが登場することによって、より明らかに二つの異なったスポーツへと展開した。たとえば、1863年にロンドン・フットボール協会(London Football Association)が組織され、足でボールを蹴るスポーツとしての「アサック (Assoc)」略して「サッカー (Soccer)」の規則を成文化した。これに対して、手で持って走るスポーツとしてのラグビーは、1871年にラグビー協会 (Rugby Union) が組織されることによって、その規則が成文化されていくのである。¹¹

一方、大西洋のこちら側のアメリカでも、かなり早くからフットボールが大学で行われていたことは、いくつかの文献から明らかである。たとえば、プリンストン大学では、1820年に学生たちがボールオウンと呼ぶフットボールに興味を持ったが、そのやり方は拳でボールを叩いて前進させるものであり、のちにボールを蹴るようになったという。そして、1840年ごろになると、ゲームは組織的なものへと発展し、対抗競技として定まった時期や場所が設定されるようになった。しかし、現在のアメリカンフットボールの成立と発展は、1860年代末以降の東部地域における大学生たちの活動を待たねばならなかった。

1869年11月6日、プリンストン大学とラトガース大学は、現在でいうサッカーのルールに近い競技規則を用いて、アメリカ初の大学対抗戦を行った。場所はニュージャージー州ニューブランズウィックにあるラトガース大学の校庭で、全長120ヤード・全幅75ヤードという大きなフィールドを使い、試合は1チーム25名、審判は存在せず、ボールは丸く、手で持つことを禁ずるものであった。試合結果は、ラトガース大学が6点、

11 Camp and Deland, *Football*, 154-5. 一般的には、1823年にパブリックスクールの一つであるラグビー校で、ウィリアム・エリス (William Webb Ellis) がフットボール試合の最中にボールを持って走ったことがラグビーの発祥であり、これを1841年にラグビー校が正式に採用し、その後、ケンブリッジ大学がスポーツとして普及させた、と理解されているが、ラグビーの歴史的起源については諸説ある。

プリンストン大学が4点であった。これは、初めてのフットボール大学対抗戦という意味で記念すべき日である。しかし当時のアメリカにはまだ統一的に成文化されたフットボールの競技規則は存在しなかったし、特定の地域での競技活動を統轄する組織も存在しなかった。いくなれば、フットボールにかかわるスポーツ活動はそれほどまでに未成熟であったといえよう。とはいえ、大西洋沿岸の大学間で大いに興味をそそったため、それまでの比較的緩慢な発展段階から脱して、1870年以降のフットボールは急速な発達を示し、各地の大学で組織化の方向へ進み始めたのである。¹²

事実、1870年代になると、東部のいくつかの大学で学内対抗戦のためにフットボール協会が設立され、競技規則も成文化されていく。たとえば巻末の表で示したように、1871年10月にプリンストン大学がプリンストン・フットボール協会を設立し、10条からなる競技規則を採択した。またイエール大学は、イエール・フットボール協会を1872年10月に設立し、その競技規則は12条からなっていた。ハーバード大学も1872年12月にハーバード・フットボールクラブをつくり、翌年の規則制定の礎としたのである。

こうして、他大学に大きな影響をもつ三大学、すなわちハーバード、イエール、プリンストン大学のそれぞれで個別のフットボール競技規則の成文化をみることとなった。なかでも、とりわけハーバードとイエール両大学は、フットボールをはじめとする大学スポーツが将来たどることになるであろう方向を決定するうえで、重要かつ先導的な役割を果たした、といわれている。プリンストンとイエール両大学ではそれぞれに、サッカーと類似した競技規則が成文化された一方、ボストン型ゲームを実践していたハーバード大学では、これら二大学とはいくつかの点で明らかに異なる特徴をもつ競技規則を採用した。

とくに注目すべき特徴として、すべての選手がボールをキャッチしたり、拾い上げることがハーバードでは認められていたのである。そこでは、ボール保持者が相手に追いかけている場合にのみ、その選手はボールを手

12 プリンストン大学は最初の試合の翌週にリターンマッチを申し込み、今度はラトガース大学とは異なるプリンストンのルールをもとに試合を行い、8対0で勝利した。試合後は、両校の選手がスピーチを交互に行い、歌をうたうなど和気藹々とした雰囲気であったという。

に持って走ることが許されていた。ボール保持者を追いかける選手は、自分が追跡をあきらめた時点で、ただちに追跡断念を大声でボール保持者に呼びかけた。しかし、もしボール保持者がただちに止まらなかった場合には、ボール保持者の味方チーム選手全員が同じように叫び、保持者に停止を求めた。つまり、規則の精神を尊重し、「あらゆる不正行為を忌み嫌う強い意志をもって競技に参加する」という、イギリスの上流階級的な価値観を遵守することにより、ごまかしの行為がほとんど生じえない状態が維持されていた。こうして、多くの大学でサッカー型フットボールが発展していくなか、ハーバード大学だけがサッカーよりもラグビーに準ずる独自の試合規則で競技していた。¹³

このように、東部の大学が独自の組織と競技規則をもって活動する過程で、プリンストン大学は大学フットボール連盟を結成するための運動を開始した。すなわち、プリンストン・フットボール協会は、コロンビア、ハーバード、ラトガースおよびイエールの各協会に対して、1873年10月19日に会合をもち、組織やルールについて話し合いたい旨通知した。コロンビア大学とハーバード大学は欠席し、リーグ結成計画は棚上げにしつつも、とりあえず共通の試合規則を作成することで合意した。この結果つくられた新しい試合規則は、イエール大学のサッカー型試合規則とほとんど同じ内容のものであった。¹⁴

こうしてハーバードの学生たちは、競技規則の違いを理由に他大学の学生と試合をすることはなかったが、1874年5月にカナダ経由でラグビーがアメリカに渡来した。これは、イギリスでラグビー協会が結成されて共通規則ができた3年後のことであった。デイビッド・リースマンとルーエル・デニーが指摘しているとおり、「南北戦争後、イエール大学とハーバード大学は、イギリスのゲームを輸入するに当たり、文化的理解力に優れた役割を果たした」のである。彼らによると、フットボールがアメリカに渡来すると、サッカーは排除され、他方のラグビーは非イギリス的なものへと変容を余儀なくされたという。そして、「アメリカ人プレーヤーたちは、一度『走る』ゲームを試すと、サッカー型のフットボールに未練はなかった。

13 Smith, *Sports and Freedom*, 48-50.

14 Ibid.

そして、同時に彼らはイギリス式のルールに従って、ラグビーを楽しむことを欲しなかった、否でできなかったというべきだろう」と結論付けている。¹⁵

この1874年5月14日と15日の両日における、カナダのマギル大学とハーバード大学の対抗戦は、アメリカンフットボールの歴史においてもっとも記念すべき日のひとつと評価されるほど、重要な意義をもっていた。両大学による試合は、当初モントリオールとケンブリッジでそれぞれ行われる予定であったが、ハーバード大学教授会の反対によって実現せず、ケンブリッジでのみ行われた。5月14日の第1試合はハーバード大学のボストン・ルールで行われてハーバードの勝利。翌日の第2試合は、マギル大学が採用していたラグビー・ルールが適用され、マギルが勝利した。

その後、ラグビー・ゲームの普及をめざして、ハーバードの学生はキッキングゲームを完全に捨て、まずイエール大学と試合をする準備に入った。その結果、1875年11月に両校の代表がマサチューセッツ州スプリングフィールドに集まった。ハーバード大学アスレチック・クラブ代表のグリーンとイエール大学アスレチック協会々長のウェッブが中心となり、ハーバード大学が1チーム15名でラグビー・ルールを加味することを要求した。これにイエール大学が「譲歩」したため、ラグビーの基本的要素を踏襲した譲歩のルール (concessionary rules)、つまり卵形で皮製のボールを使い、それぞれのチームからジャッジを一人ずつ選出し、論争が起きた時に解決をするレフェリーを一人置く形で規則に合意をみた。そして、ハーバード大学が4対0で試合に勝利した。この時の観客数は2000名、入場料が50セント。大学対抗戦史上、初めて両軍がユニフォームをまとった試合となった。イエール大学チームは、灰色のズボンと青いシャツ、それに黄色い帽子をかぶり、一方のハーバード大学は深紅色のシャツとストッキング、膝丈ズボンを着用した。ここに、真の意味でアメリカンフットボール誕生への道をひらくことになった。¹⁶

この1875年11月13日のイエール・ハーバード戦を見ていた観衆の

15 David Riesman and Reuel Denney, "Football in America: A Study in Cultural Diffusion" *American Quarterly* 3.4 (Winter 1951): 313.

16 Caspar W. Whitney, "Early Intercollegiate Meetings" *Harper's Weekly* 28 May 1892, 525.

中に、プリンストン大学の2人の選手がいた。彼らは、まず翌1876年11月2日にラグビー協会のルールを正式に採用することを学内で提唱し、さらにハーバード、イエール、コロンビア大学に呼びかけてルール制定会議を開く事にした。同年11月26日、こうしてマサチューセッツ州スプリングフィールドのマサソイト館に4大学からそれぞれ2名の代表が集まり、アメリカ大学フットボール協会 (American Intercollegiate Football Association : AIFA) を創設し、ラグビー協会のルールに多少の修正を加えた案を採択した。それによると、ボールを持って走り、タックルすることを認めたのである。こうしてラグビーのルールをほとんどそのままとり入れた競技規則をもつアメリカの大学フットボールが誕生したのだが、これだけではアメリカのフットボールがアソシエーション式からラグビー式へ変わったという意味しかもたない。全く新種のフットボールが生み出される第一歩に過ぎなかったのである。¹⁷

アメリカ独立100年祭の記念すべき1876年11月に開かれた第一回AIFA総会において採択された競技規則59によると、「競技チームそれぞれの側に審判 (judge) が一人ずつと、さらに主審 (referee) とで審判団を構成し、紛争が発生した場合には、主審の判断に委ねられ、彼の審判が最終的なものとなる」と規定された。この規則に関して、英米比較をしたパーク・デイヴィスは「まったく新しい発想である。というのも、ラグビー協会の規則に拠れば、両チームのキャプテンが審判 (official) の役割を果たしたからである」と結んでいる。つまり、ビクトリア朝の英国社会において、パブリックスクール間の競技では、規則を解釈するのでも守らせるのも主将の仕事だったのである。別の言い方をすれば、紳士のスポーツをたしなむ生徒たちにとって、第三者的な審判団は不要で、自らを律する道徳的な資質をすでに身に付けていることが大前提だったというのである。後日、ウォルター・キャンプは「ラグビー・コードは伝統が法律ほど古くから根付いてきた英国人にとって相応しい。何か紛争が発生した場合、経験者が発した言葉が決め手となる。そこではルールを曲げる事が許されない。だが、アメリカの大学生の場合、これが難しい。起りうる問題の半分程度しかルールでは扱われていないし、そもそもアメリカには伝統が存在しな

17 Walter Camp, *American Football*. New York: Harpers, 1891, 8.

いのである」と述べている。¹⁸

事実キャンプは、レフェリーの裁定が最終的であることがアメリカでは理解されていない、と嘆息していた。彼によると、たとえ対戦チームの双方に意見の食い違いがあっても、観客の多くは審判団が間違っていると考えていても、レフェリーの裁定は覆らないのだ、と。裁定に対して不服申し立てをする裁判所は存在しない。つまり、二つの対戦チームがある組織に所属し、かつその組織が不服申し立てのための場を規定していない限り、レフェリーの判断が絶対である。「スプリングフィールドで行なわれたハーバード大学対イエール大学の試合後、新聞各紙で審判団に関して議論が戦わされたが、結果的には何も変らなかった。対戦成績はそのままである。事実、対戦チームが審判団を承認した段階で、彼らの判断にすべてを委ねる合意をしたことになるのである」とキャンプは結論付けていた。¹⁹

確かに、AIFAが最初に採用した競技規則は、ラグビー協会の規則と大きく変わることはなかった。さしずめ、英国式ラグビーがアメリカ式ラグビー「アメラグ」と小さく変化したと形容できようか。ところが、1880年代に入るとフットボールのアメリカ化が加速化した。まず、1880年に大きなルール改正が行なわれ、その結果、一チーム15人制を変更して、11人構成となった。これはイエール大学のチームが長年主張し続けてきた改正であった。また、同年10月12日に開かれたAIFAの会合で、ラグビー式のスクラムを廃止し、ボール保持を明確化させる目的でスクリメージを採用した。そもそもスクラムは、両チームの選手たちが球のある場所に群がって足を使い、敵のゴールラインめがけて、前方へ蹴りだす行為を指した。しかしこれは、アメリカ人の立場からすると、どこに球が出てくるのか極めて不確実性の高い、不合理な行為と認識されたのである。そこで、スクリメージを以下のように定義して、ボールの所有権を明確化させるとともに、プレーの開始を明示させようとした。つまり、ラグビーにおけるスクラムに替わるスクリメージとは、「フィールド内でボールを手を持った者が、目の前にボールを置き、足を使ってプレーを始める際に形成

18 Camp, *American Football*, 20-21; Walter Camp, *Walter Camp's Book of College Sports*, New and Revised Edition, New York: The Century, 1901, 88; Walter Camp, *The Book of Football*. New York: The Century, 1910, reprint, 2010, 14.

19 Walter Camp, "College Football" *Harper's Weekly* 27 November, 1897, 1186.

されるものである」とする規則改正第一条を定めたのである。²⁰

IV

こうしてイギリス生まれのフットボールは、大西洋を渡り、アメリカの大学において様々な規定変更を経て、アメリカの価値観を反映するスポーツへと歴史の変容を遂げてきた。たとえば、植民地時代のアメリカで、フットボールはヨーロッパにおける民間ゲームよろしく二つのグループに分かれてゴールめがけてボールを蹴り合うものとして親しまれていた。しかし、独立革命後は、アメリカの大学内で対抗戦としてフットボールが行われるようになった。イギリスの大学で見られたように、上級生が下級生に対して試合を挑んだり、クラス対抗のゲームが行われた。大学当局の心配をよそに、フットボールは大学内での権力闘争の様相を呈したのである。これが、大学間の競技に発展したのは、1869年のことで、プリンストン大学が同じニュージャージー州内にあるラトガース大学との間で大学対抗戦を行った。翌1870年には、コロンビア大学が参戦して、サッカー形式のフットボールが大学対抗競技として定着していくのである。

ところが、フットボールが大学スポーツとして発達していくに従い、各大学で決められた競技規定が混在することで、混乱が起るようになった。そこで、1873年には複数の大学が集まって共同の規定作りに着手した。イエール大学はイギリスのサッカーと異なる規定として、ボールをこぶしでたたくことを許容する規定を提案したが、この協議にハーバード大学は加わらなかった。翌1874年にハーバード大学は、カナダのマギル大学との間で、各11名ずつで戦うラグビー式のフットボール、つまりボールを持って走ることが許される競技を行った。翌1875年には、この規定にもとづいてハーバード大学がイエール大学と戦い、翌1876年ついにハーバード、コロンビア、プリンストン大学がラグビー式のフットボールに関する大学間競技規定を作成するに至り、イギリスから渡って来たサッカーともラグビーとも異なるアメリカンフットボールへと展開する歴史的に大

20 “Amendment #1, adopted on 12 October, 1880” qtd. in Michael Oriad, *Reading Football: How the Popular Press Created an American Spectacle*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1993, 25; Camp, *American Football*, 12.

きな第一歩を踏み出したのであった。

さて、アメリカンフットボール史の「第二幕」ともいえる1880年から1920年までの時期、アメリカのプロテスタント諸派は、「力強いキリスト教 (muscular Christianity)」つまり、信仰を盛んにすると同時に肉体を強健にして快活に生活する主義を展開した。たとえば、社会的福音を唱えたジョサイア・ストロングは、強い肉体があってこそ善行が可能だと考えた。また、フットボールによる死傷者が続出して大学スポーツとしての存亡の危機にあった時にこれを救ったセオドア・ローズヴェルト大統領は、奮闘する信仰こそが「奮闘的な生活 (strenuous life)」につながると説いた。つまり、キリスト教主義に基づく男らしさを求める彼らは、都市化し女性化するアメリカ人の生活様式に一石を投げようとしていた。その目的を達成するための手段が、競争的スポーツ、学校における体育教育だったのである。²¹

そもそも、19世紀末から20世紀初頭にかけてアメリカで盛んになった力強いキリスト教という動きは、1850年代のイギリスに起源をもつ。トマス・ヒューズとチャールズ・キングスレーの二人は、英国各教会が、身体的弱さに対して余りにも寛容になり過ぎたことを問題視し、イギリス帝国主義の要請に応えられる人材育成を目的とした健康と男らしさを追求する運動を始めた。これが大西洋を渡り、ユニタリアン派の牧師であるトマス・ヒギンソンによって、アメリカ社会に紹介されていく。1858年『アトランティック・マンズリー』誌上で、ヒギンソンは「聖人とその身体」と題する論考を発表し、ヒューズとキングスレーを賞賛し、アメリカのプロテスタントの間でこそ、健康と男らしさが広まることを強く望んだ。彼こそが、前述のとおり、大学対抗戦が行われる以前の1840年代のハーバード大学におけるフットボールを、男のスポーツとして回想した人物である。²²

こうした環大西洋思想史的な文脈を踏まえて、フットボールのアメリカニゼーションについてさらに考察することは、機を改めて行うことにし

21 John R. Betts, "Mind and Body in Early American Thought" *Journal of American History* 54.4 (March 1968): 787-805; Clifford Putney, *Muscular Christianity: Manhood and Sports in Protestant America, 1880-1920*. Cambridge: Harvard University Press, 2001.

22 Nick J. Watson, et al. "The Development of Muscular Christianity in Victorian Britain and Beyond" *Journal of Religion and Society* 7 (2005): 1-21; Thomas W. Higginson, "Saints, and Their Bodies" *Atlantic Monthly* 1.5 (1858): 583-588.

たい。とくに身体の問題としてだけフットボールを読み解くことに関しては「フットボールの父」の異名をとるウォルター・キャンプ自身が異議を申し立てている。1896年に出版したロリン・ディーランドとの共著『フットボール』の「まえがき」で、身体運動として一般に認識されているフットボールだが、より深く考察すると「完全なる男性を作り上げるのに必要な精神的素質を育てられることが発見できよう」と指摘し、たとえば、即断即決、服従、自己犠牲、自分を頼ること、勇敢さなどが、その例として挙げられているのであった。²³

「各大学フットボール協会による規定」

	プリンストン大学	イェール大学	ハーバード大学	4大学ルール	『護歩のルール』
規則制定時	1871年	1872年	1873年	1873年	1875年
フィールド	500 x 300 フィート	400 x 250 フィート	250-450 x 255-325 フィート	400 x 250 フィート	300-400 x 150-250 フィート
ゴール	25フィート間隔	20フィート間隔	規定なし	24フィート間隔	20フィート間隔
選手数	25名	20名	10名	20名	11-15名
勝敗	7ゴール中4ゴール	9ゴール中5ゴール	5ゴール中3ゴール	6ゴール	ゴール数
時間	規定なし	規定なし	規定なし	規定なし	2時間以内で主将に一任
手の使用	不可	不可	捕球可、送られたボール持ち運び可	不可	捕球、持って走る、タックル可、ただし抱き上げるのはキックの際のみ

主要参考文献

一次資料

- Camp, Walter. *American Football*. New York: Harpers, 1891.
- _____. “College Football” *Harper’s Weekly*. 27 November, 1897, 1186.
- _____. *Walter Camp’s Book of College Sports*. New and Revised Edition. New York: The Century, 1901.
- _____. *The Book of Football*. New York: The Century, 1910, reprint, 2010.
- _____. *Football for the Spectator*. Boston: The Gorham Press, 1911.
- _____. *Athletes All: Training, Organization, and Play*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1919.

²³ Camp and Deland, *Football*, 135.

- _____. *Football Without a Coach*. New York: D. Appleton, 1920.
- Higginson, Thomas W. “Saints, and Their Bodies” *Atlantic Monthly*. 1.5 (1858) : 583-588.
- Whitney, Caspar W. “Early Intercollegiate Meetings” *Harper’s Weekly*. 28 May 1892, 525.

二次資料

- Bergin, Thomas G. *The Game: The Harvard-Yale Football Rivalry, 1875-1983*. New Haven, CT: Yale University Press, 1984.
- Bernstein, Mark F. *Football: The Ivy League Origins of an American Obsession*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press, 2001.
- Betts, John R. “Mind and Body in Early American Thought” *Journal of American History*. 54.4 (March 1968) : 787-805.
- _____. *America’s Sporting Heritage, 1850-1950*. Reading, MA: Addison-Wesley, 1974.
- Bloomfield, Anne. “Muscular Christian or Mystic? Charles Kingsley Reappraised” *International Journal of the History of Sport*. 11.2 (1994) : 172-190.
- Canby, Courtland. “A Note on the Influence of Oxford University upon William and Mary College in the Eighteenth Century” *William and Mary Quarterly*. 21 (July 1941) : 243-247.
- Cavallo, Dominick. *Muscles and Morals: Organized Playgrounds and Urban Reform, 1880-1920*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press, 1981.
- Corbett, Bernard M. and Paul Simpson. *The Only Game That Matters: The Harvard/Yale Rivalry*. New York: Crown, 2004.
- Danzig, Allison. *The History of Football: Its Great Teams, Players, and Coaches*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1956.
- Gems, Gerald R. “American Sports, 1861-1889” in Murray R. Nelson, ed. *Encyclopedia of Sports in America: A History from Foot Races to Extreme Sports*. Westport, CT: Greenwood Press, 2009, 41-74.

- Hall, Donald E., ed. *Muscular Christianity: Embodying the Victorian Age*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- Kaplan, Amy. “‘Left Alone with America’: The Absence of Empire in the Study of American Culture” in Amy Kaplan and Donald E. Pease, eds. *Cultures of United States Imperialism*. Durham, NC: Duke University Press, 1993, 3-21.
- Mangan, J. A. and James Walvin, eds. *Manliness and Morality: Middle-Class Masculinity in Britain and America, 1800-1940*. Manchester, England: Manchester University Press, 1987.
- Martin, John Stuart. “Walter Camp and His Gridiron Game” *American Heritage*. 12.6 (October, 1961) : 50-55.
- Oriad, Michael. *Reading Football: How the Popular Press Created an American Spectacle*. Chapel Hill, NC: University of North Carolina Press, 1993.
- Powel, Harford. *Walter Camp: The Father of American Football*. Boston: Little Brown, 1926.
- Putney, Clifford. *Muscular Christianity: Manhood and Sports in Protestant America, 1880-1920*. Cambridge: Harvard University Press, 2001.
- Riesman, David and Reuel Denney. “Football in America: A Study in Cultural Diffusion” *American Quarterly*. 3.4 (Winter 1951) : 309-325.
- Smith, Ronald A. “CAMP, Walter Chauncey” *Biographical Dictionary of American Sports: Football*. New York: Greenwood Press, 1987, 85-87.
- _____. *Sports and Freedom: The Rise of Big-Time College Athletics*. New York: Oxford University Press, 1988.
- _____. *Pay for Play: A History of Big-Time College Athletic Reform*. Urbana, IL: University of Illinois Press, 2010.
- Watson, Nick J. et al. “The Development of Muscular Christianity in Victorian Britain and Beyond” *Journal of Religion and Society*. 7 (2005) : 1-21.
- Watterson, John Sayle. *College Football: History, Spectacle, Controversy*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 2000.

フットボールのアメリカニゼーション(2) 19世紀における大学スポーツの環大西洋史をめざして 19

*本稿は、上智大学研究機構学内共同研究「アメリカと大西洋世界—アメリカ像の環大西洋的構築を目指して」の成果の一部である。

